

親役割に関する研究

—母親の就労と父親の家事・育児参加—

河野 利津子

(幼児教育科)

I はじめに

乳幼児をもつ母親の就業率は世界的に高まっており、家庭内の男性役割、とりわけ父親としての積極的参加はさらに求められてきている。

1970年代から80年代にかけて、スウェーデン、ノルウェー、アメリカ、オーストラリア、イスラエルなど各国で、育児参加の高い父親 (*highly involved or participant father*) の実態とその先行条件や影響要因の研究がなされた。父子関係の研究は、主として母子関係研究と同様の研究方法をとりながら、乳幼児期の母子・父子関係の質的および量的比較を行ってきた。全体的には *mothering* と *fathering* は、相異より類似性の方が大きいと結論されながら、親子関係を、母子の二者関係中心の捉え方から、父—母—子の三者からなる家族システムとしての捉え方に焦点が置かれるようになってきている。

父親の家庭参加の増大の根底には、フェミニズム運動、伝統的性別役割観から平等主義的役割観への移行がある。父親が稼ぎ手であり、母親が家事・育児を担うという分業 (観) から“男も女も、仕事と家庭を”という共業 (観) へ移行しつつあるということ、またあるいは、妻の社会参加を支援し、子どもとのより情緒的な関係に価値を置くような父親、職業と家庭の役割を生活に統合させようとする父親が増えている、と言い換えることもできよう。

これまでの父親研究から、父親は妊娠と哺乳以外は、全ての育児行動に携わる能力のあることを明らかにしてきた。とくに従来は母親の特質であったとした“養護性 (*nurturance*)”が、父性的特質でもあり、父親の高い関与が子どもの知的・社会的発達を促すこと、とりわけ内的統制や共感性、適応能力などの社会的能力や高い達成動機づけと関連すること、また父親の家庭内役割の実践をモデルとして、固定的性別役割

にとらわれない、より平等主義的性別役割傾向が男女児にみられること等を明らかにしている。近年の高学歴の父母たちはより平等主義的性別役割観をもっていること、また概して、親の役割を平等に分担しようとする社会的傾向が徐々に強まってきていること (Harris & Morgan, 1991) がいわれる。その一方で、伝統的性別役割観によって多くの親たちは心理的抑圧を受けており、増えつつある父親の家庭関与は、必ずしも全ての家庭における万能薬ではない (Russell, 1986) という現実もある。

本稿では、親役割研究、親子関係研究に重要な位置を占める父親の家事・育児参加をめぐる要因について検討しながら、とくに母親の就労が規定する父親の家事・育児参加の特質 (問題) を明らかにすることをねらいとする。

II 父親の家事・育児 (*family work*) 参加をめぐる要因

父親の家事・育児への参加を規定する要因は、複数であり、しかも共働きか片働きかという夫婦の就労形態によって、要因は質的に異なることを最近の研究は明らかにしている (Crouter, et.al, 1987; Stanley, et.al, 1986; Volling & Belsky, 1991)。以下で、それらの要因を5つ挙げて、共働きと片働きの各々の形態との関連をみていきたい。

(1) 父親の個人的特質、動機づけ

どのような父親が家事・育児によく関わるのか、という父親の性格的な特徴を明らかにした研究は多い。例えば Bem らの性タイプ評定を用いて、女性性あるいは両性性得点の高い父親は、家事・育児参加が高い傾向にあるという結果を明らかにしたもの (Russell, 1978; Feldman, et.al, 1983; Palkovitz, 1984)、また遊びやレジャー活動と育児活動の頻度から父親の参加度を調べた結果、友好的で世話好きな父親ほど遊び

行動の出現頻度が高いことを、(Levy-Shiff&Israerashville, 1986)そして子ども中心に物事を考え、自己価値感の高い父親ほど、18ヶ月児の育児行動を多く現わし、低い父親ほど親役割にストレスを多く示したことを明らかにしている(Cowan & Cowan, 1987)。非伝統的家族形態(母親が就労し父親が家事・育児をする、あるいは共働きの形態)を選んだ家庭の父親に関する研究では、父親に自尊心や独立心が強く、子どもを思考や行動の面で親とは独立した存在と見なす育児態度傾向が強かったこと(Russell, 1983)、また精神的疲労や不安が少なく、内的統制が強く、敏感で、受容的で積極的な父親、すなわち統合された人格特性をもつ父親が、より家事・育児に参加していた(Cowan & Cowan, 1987; Heath, 1976; Mondell & Tyler, 1981)などの結果もみられる。結局、fatheringは、変化する子どもの状況に適切して、育児要求に進んで対処する能力など人格的統合や成熟を必要とする(Levy-Shiff & Israerashville, 1990)のである。これらの特質は、motheringも含め、親としての役割遂行にとって重要な人格的特質と考えることができる。

(2) 乳児の気質、性別など

親と子の直接的な関わりは、出産と同時にスタートするが、生まれた乳児の気質が扱いにくい(difficult)かそうでないか(easy)の問題は、父親の育児参加にかなりの影響を与える。すなわち新米の親として、扱いにくい子は働きかけていく際に、父親自らの効果性やコントロール感覚が育たないため、関わりが減少していくといわれる(Sirignano & Lachman, 1985; Bates, 1979)。この点は父親に限らず母親にも当てはまることであり、親としての感受性、応答性、育児スキルなど全般的な育児コンピテンスの発達と関連が深い。乳児の気質は、成長する過程を通して、親子の相互作用の質に影響していく要因の一つと考えられよう。

乳児の性別でみた時、父親と母親共に自らの息子と娘には異なる方法で関与するといわれる。父親は男児に対し世話や関わりが多く、強い情緒的な結びつきがある一方、母親は女兒に話しかけたり、女兒と相互の関わりが多い(Lamb, 1976; Parke, 1979; Dickie, 1987)ようである。

(3) 三世代関係

父親自身が子ども時代にどのような父子関係を経験しているかという要因もまた、父親の現在の家事・育児参加の程度や質を規定している。父親自身が自らの父親をどのように受けとめ、受け入れているかという視点から2つの型が挙げられている。1つは“模倣型”

である。自分の父親がよく関わってくれた経験をもつ父親は、我が子とも十分関わり、遠い存在だと感じていた父親は、我が子とも関わりが薄くなるという解釈である。他方は子ども時代の自らの経験を補おうとする関わり方、つまり自分の父親とは接触が少なかったため、我が子とは十分に関わりたいという“補償型”である。概して、最近の実証研究の多くは、補償仮説を支持している(Russell, 1985; Radin, 1982; Barnett & Baruch, 1984)。

母親についてはどうであろうか。非伝統的家族形態を選んだ母親は、子ども時代には自分の父親と良好な、養護的(nurturant)関係を結んでいたこと(Radin, 1982)、また伝統的家庭に育っていても積極的な父娘関係であったことと関連が深い(Feldman, Nash & Aschenbrenner, 1983)、そしてまた、父親の高い育児参加は、娘が成人して職をもつことと高い相関がみられたこと(Radin, 1982)などを明らかにしている。母親の就労は、女兒にとって非伝統的なモデルになり、父親の高い家庭関与は、女兒の社会参加を促すようである。

(4) 母親の就労、性役割態度、親役割意識

母親自身が働くことや性役割について、どのように考えているかは、父親の家事・育児参加を大きく規定するものであろう。働く妻をもつ夫の方が、専業主婦の夫よりも当然家事・育児参加は多いであろうし、妻の就労の形態や労働時間数によっても、夫の参加の範囲や程度も異なる。一般には、妻の労働時間が長いほど夫の参加は多くなり、パートタイマーよりフルタイマーの妻をもつ夫の方が参加は多くなる傾向はみられる。

母親の就労そのものが既に非伝統的性役割行動であるが、母親がより平等主義的性役割観をもつほど(McHale & Huston, 1984)、また稼ぎ手という男性役割に対して肯定的態度であるほど(Barnett & Baruch, 1984)、また母性本能といったものを否定し、父親と母親には基本的な親の能力に違いはないと考えるほど(Russell, 1962, 1986)、父親の家事・育児参加は多かったのである。興味深いことに、非伝統的ライフスタイルの選択にあたっては、母親が男性役割を志向する性役割態度の方が、父親のそれよりも強い先行条件となっていたのであった(Barnett & Baruch, 1986; Russell, 1982, 1983)。

家庭関与度の高い父親は、一般に両性的特質を備えているといわれるが、父親の性役割態度は、親役割遂行とどのように関連しているのであろうか。先にも述べたように、fatheringとmotheringの両者は、相異より類似性の方が大きく、三者関係の中でほとんど同じように発達していくことが明らかにされてい

る。しかし父親はむしろ第2の母親でもなければ単なる母親の助手でもない。父親は、親役割に男性的特質(maleness)を持ち込むのである。参加の多い父親の子どもは、父親を“女々しい(sissy)”とではなく、“力強く(forceful)”“より厳しい(stricter)”存在だと見なす(Rossi, 1984)ようである。別の研究も参加の多い父親は、そうでない父親よりも、子どもから“養護的”で同時に“支配的(dominant)”であると見なされるであろうと結論づけている(Barnett & Baruch, 1986)。

(5) 夫婦関係の質

一般に、質の良い夫婦関係は父親の高い家事・育児参加を予測するものであり、fatheringにおける夫婦相互の満足度も高い。また父親の家庭関与が高いほど、母親の満足度も高く、それは夫婦関係上の満足度も高めるといわれる。しかし一方で、父親の参加が相対的に多くなる共働き家庭では、夫婦関係の質的貧困がむしろ参加の先行条件になっている、あるいは夫の妻への愛情が強いほどむしろ育児に参加していない(Crouter & Huston, 1985)などの研究がみられる。そこで次に、共働き家庭と片働き家庭で、父親の家庭関与がどのように異なっているのか、母親の就労やストレス、役割責任の問題を取り挙げて、夫婦関係を考察していく。

Ⅲ 共働き家庭と片働き家庭—育児参加を規定する要因の質的差異

Belsky (1981, 1984) は、parentingの規定要因を体系化していく過程で、父親の育児参加を規定する要因として父親の性格の特質、乳児の気質、ストレスとサポートの源泉(夫婦関係、社会的関係、職業経験)を挙げた。そしてさらに、fatheringの最大の影響要因は、父親の人格あるいは心理的安寧(psychological well-being)であろうと結論づけた。しかしのちの共働き対片働きという社会的カテゴリー内の幾つかの比較研究では、2つの形態間で明らかに要因が異なることを示した(Volling & Belsky, 1991; Crouter, et. al, 1987; Barnett & Baruch, 1987; Stanley, Hunte & Hunt, 1986)。

例えば、片働き家庭では父親の個人的性格の要因が父親の育児参加を規定していた最大要因であったが、共働き家庭ではそれは見られなかった(Volling & Belsky)。また、片働き家庭では父親自身を育児スキルが高いと認識していることが、実際の参加の高さと有意に関連していたが、共働き家庭では見られなかったし、また共働き家庭では否定的な夫婦関係が

育児参加の高さと正の相関を示したが、片働き家庭では見られなかった。さらに「妻と一緒に子どもの世話をする時間」と「子どもとのレジャー時間」では両家庭間に差はなかったが、「父親による単独の育児時間」では、共働き家庭で片働き家庭の2倍の時間が費やされていた(Crouter, et. al, 1987)のである。

父親の家事・育児参加の要因を2つの就労形態で比較した別の研究も、双方の違いを明らかにして、共働き家庭では母親の就労に関する変数と母親の性役割態度が最大の要因であったが、片働き家庭では父親が子ども時代に受けた子育ての質が最大の要因であった(Barnett & Baruch, 1987)とした。すなわち共働き家庭の父親参加は、妻自身の就労に対する態度や必要性に条件づけられているため、妻の性役割態度がリベラルであること、また妻の実質的労働時間が長いことが夫の家事・育児参加の重要な要因であった。一方片働き家庭では、父親が自分の子ども時代に父親と疎遠であったと不満に感じているほど、子どもとよく関わっていたのである。片働き家庭の参加の多い父親は、我が子には補償的に関わりたい欲求が強く、子どもとより親しい直接的な関係を望んでいるという結果であった。

結局、共働き・片働き家庭の比較を行うと、片働き家庭の父親にとって家事・育児参加は個人的な技能や好みも含めた“選択”の問題であるが、共働き家庭では個人レベルの問題ではなく、家庭を円滑に機能させるために不可欠な問題とすることができる。言い換えれば、片働きの父親にとっては性格や子育ての技能、また自らの父親体験などを基礎的条件として、自ら参加の程度を選択しうる余地が大きいものに対して、共働きの父親にはそれはなく、むしろ家庭参加は母親の就労を支えるための絶対条件であり、母親のリベラルな性役割態度や平等主義的親役割観が重要な要因になっているのである。Crouterら(1987)は、結局共働き家庭では、母親の就労を支える上で父親に家事・育児参加を押しつけることになり、そのことによる否定的な夫婦関係が、参加を促す最大要因になるという説明をしている。ともかく、共働き家庭では、夫婦の否定的関係は、幾つかの研究において父親の家事・育児参加と一貫して強い正の相関がみられたのである。

そこで、次に共働き家庭の場合の父親の家庭関与に強い影響を及ぼしている2つの要因、すなわち(1)夫婦関係の質、(2)「仕事—家庭」葛藤について、さらに詳しく検討したい。

IV 共働き家庭における夫婦関係の質

共働き家庭 (dual-earner family) とは、「世帯の2人の長 (heads) が職業を追求すると同時に、家庭生活も一緒に維持するような家庭のタイプ」と定義されている (Rapoport & Rapoport, 1976) ように、家庭内の家事・育児労働と家庭外の職業労働の両方を、夫婦が共に遂行する生活スタイルである。

西洋社会では、男性の方が女性より結婚において多くを得て、男性の方が結婚でより幸福になると見なされているが、その理由の殆どは家庭内の役割や責任の質 (的差異) によるという考え方が根強い (Bernard, 1972)。戦後から盛んに行なわれている結婚の満足度の研究によっても、既婚女性より既婚男性の方が概して心理的疲労感が少ないという結果を示してきている。また夫婦の満足度については、従来は低所得階層の共働き夫婦を対象とした研究が多かったために、片働き夫婦より共働き夫婦の方が葛藤が多く、不満度も高いというのが一般的であった。しかし最近の夫婦関係の研究結果からは、満足度はマイナスからゼロあるいはプラスへと変化している (Spitze, 1988)。

共働き夫婦の、とくに夫側の不満の高さについては、妻の就労そのもの (すなわち職業役割) ではなく、家庭で妻からサービスが受けられないことにある (Stanley, Hunt & Hunt, 1986) と解釈されている。つまり夫たちは家庭内の伝統的女性役割が変化していることに対して不満なのであり、夫が従来なら携わることのない女性役割を担うことに憤慨なのである。そしてそのことが夫婦間の摩擦や葛藤を生んでいるのである。

夫の家事・育児参加の研究では、共働き家庭の夫の関与の範囲と質が夫婦関係の質を規定することを明らかにしている。例えば、夫と妻が公平な分担をするほど、共働きの妻の満足度は高かったが、夫にとっては妻の分担分が多いほど満足度は高かった (Yogev & Brett, 1985) のである。全体的労働量の分担 (share) が双方にとって公平であること、家庭への互いの貢献が公平であることこそが、平等であることにとって重要であると思われる。また働く母親に関する限りにおいては、夫の参加が多いほど夫婦関係上の満足度は高かったという結果もみられた (Stains, et.al, 1978)。

とりわけ Crouter らの結果で注目すべきことは、共働き家庭では子どもへの関与が多い父親ほど、妻に対して否定的な感情を示していたことである。この点では逆に片働き家庭で正の相関を示し、子どもとよく関わる父親は、妻への愛情のレベルも高かった。これ

は、片働き家庭では家事負担もなく二次的親として子どもの相手や世話のできる父親が多いのに対して、共働き家庭では、夫婦二人で家事・育児を分担するために単独で子どもと関わる責任が大きく負担に感じられている、と考えられる。これらに関して、Crouterらは、共働き家庭では親業への移行 (transition to parenthood) と、共働き形態であることの両立は、困難が多いと指摘している。

こうして、共働き家庭では父親の家事・育児参加が高いにも拘らず、夫婦間の愛情というレベルではマイナスに関与していることも明らかである。家事・育児は共働き夫婦にとって、各々異なる意味を持つ。伝統的に女性が担ってきた雑事、卑しい仕事の分担はそうでもなく、夫による子どもへの強い関与は、共働きの母親に精神的疲労や葛藤を与える (Kessler & McRae, 1982) ともいわれる。家事労働の不公平な過剰負担を、子どもとの情緒的関係を独占する形で補償しようとする母親もいるのである。

V 「仕事-家庭」葛藤 (work-family conflict) とストレス

Pleck (1985) は、父親の家庭参加への期待は高まっているにも拘らず、現実には今以上の参加を求めない妻の方が優勢であろうと指摘した。多くの妻は、家事と育児は、自分たちの責任であり、領域 (territory) であると認めており、それらによって自らの統制や権力を維持しているからだと説明している。共働き家庭でも、父親の家庭参加は多いといえるがなお妻の方が主たる家事・育児担当者であり、主要な責任を負っているという現実是否めない。片働き家庭では父親の職業労働上の疲労は、家庭労働の責任を減らす方向で解決していく。つまり専業主婦である母親に家事・育児を依存してしまうのに対して、共働き家庭では職業上の疲労やストレスを家事労働軽減によって解決することができない。夫の分担分が少なければ妻に不公平感が生じるが、その一方で妻が家事・育児領域で十分に遂行できないことが批難されればむしろ罪悪感もち、夫婦間には緊張や葛藤が生じる。共働き家庭でも伝統的に家事労働を女性の役割とする考え方が夫婦の両者にあるわけで、妻にとっては夫の家事・育児参加を歓迎しながらも、夫の家事労働のレベルが低ければ、それは妻の側の不満の原因となり、夫にとってもオーバークワックになることで葛藤は増えていく。片働き家庭ではそもそも家事労働を夫がするかどうかのレベルであるのに対して、共働き家庭では夫がいかにするかという方法上の不一致による葛藤なのである

(Russell, 1982)。

結局、家庭内労働は伝統的に女の責任であるという伝統的性別分業観が、男性と女性に根強い限り、母親の雇用労働は母親により過剰な役割負担を課すことになり、夫婦間の葛藤やストレスも減少することはないと考えられる。家庭内労働を分担しつつも、依然として母親には罪悪感や敗北感、父親には憤慨 (resentment) がその代償として残るのである (Pleck, 1985)。

非伝統的な共同育児 (shared parenting) の形態を選んできたオーストラリアの母親たちのストレス源は、以下の4つであった (Russell, 1983)。1) 子どもとの情緒的関係の希薄さ (父親の方に、より愛着を示した) 2) 父親の育児の質の低さ (子どもに甘すぎる等) 3) 父親の家事の質の低さ 4) 母親の疲労、イライラ、時間がないこと、であった。つまり身体疲労など二重役割に起因するものを除いて、ストレス源の殆どは分担(共有)することに基づく“調整=質の維持”に関わるものであることが分かる。未だ過渡期にある働く母親は、性別分業観により期待されている女性役割=家事・育児労働を、中心的養育者および主婦として満足のいくレベルで維持したいと望みながら、雇用労働との二重役割から分業せざるを得ない現状、あるいは一定の質のレベルが維持できないことに、大きな葛藤や不満を経験しているのである。

共働き夫婦は、確かに慢性的な過剰労働下にいるのであるが、仕事と家庭の2つの役割を同時に遂行しながら、疲労ばかりでなく、個人的充実感や自己達成感を体験し、それらに支えられていることも事実であろう。ストレスと充実感のはざまに、現実的な解決として乳幼児期には職業上の達成をスローダウンさせること、家事や育児の社会的サポートを利用すること、子どもの欲求を優先させるために労働時間を削減するなどに配慮しているのである。

VI 「仕事-家庭」役割の共有に向けて

Rapoport & Rapoport (1976) は、共働き家庭のコストについて、1) 仕事上での疲労 2) 社会的規範ジレンマ 3) アイデンティティ・ジレンマ 4) 社会的ネットワーク・ジレンマ (親戚・友人のつき合いができない) の4点を指摘している。これらをも共働き家庭では身体的疲労の問題と、伝統的性別分業観に基づく心理的疲労の問題の2つの側面のあることが分かる。これらのジレンマから自由になるには、共に平等主義的な性別分業観を求め、これからの世代にそれを育成していくことが重要になるであろう。

Ross ら (1983) は、アメリカの結婚が「分業=相補

型」から「共業=平行型」に移行しつつあること、及びその過渡的段階にある夫婦においては心理的疲労度が高いことを明らかにした。彼らは夫婦の形態と夫婦相互の結婚における心理的疲労 (不満) との関連を、以下の4つの段階で調べたのである。I型は、妻が専業主婦で、夫婦ともにそれに賛成であるが、夫は家事・育児に関与しない分業型、II型は、妻が生活のために働くが、夫婦ともに働くことに反対であり、しかも家事・育児は妻の責任であるような過渡的共働き型、III型は、妻は働き、夫婦ともにそれに賛成しているが、家事・育児は妻の責任であるような過渡的共働き型、IV型は、妻は働き、夫婦ともにそれに賛成し、家事・育児が平等に分担されている共業型、であった。各々の型で、心理的疲労 (不満) を比較すると、I型は夫婦ともに分業を好む点で一致しており、心理的疲労は夫により低いながらも夫婦ともに概して低い。II型は生活水準の維持のために働くことが、夫婦ともに不本意であり、心理的疲労は夫とくに高く、夫婦とも4型の中で最も高い。III型は共働きを夫婦ともに好んでいるが、家事・育児は妻の責任である点で妻の心理的疲労はまだ高く、夫は逆に低い。IV型は共働きを夫婦ともに好み、かつ家事・育児を分担しており、心理的疲労は夫婦とも4型の中で最も低い、という結果であった。

夫婦間で、働くことに対する希望と実態が一致していること、および共に働く場合にはそれを保障する家事・育児の分担があるかどうかによって、夫婦相互の心理的疲労の度合いは異なるのである。I型とIV型では、夫婦の就労希望と実態が一致し、かつ分担がなされているが、II型とIII型では、夫婦の就労希望と実態が不一致で、分担もなされていないため、心理的疲労は高くなっている。

以上の結果より、精神的に健康であるためには、夫婦間で労働の均衡 (equity) と責任を共有する感覚を保つことが非常に重要であること、また妻の心理的疲労の原因は家事そのものではなく、多くが日々繰り返しの雑用である家事を妻の責任でさせられることにあるということ、したがってそれを夫婦間で共有することにより不満は平等感に代わるであろうことを述べている。そして、夫婦双方の心理的疲労は、その過渡期には大きい、相補型から平行型への移行が完了する過程で、確実に減少していくと論じている (Ross, et. al. 1983)。

ホックシールド (1990) もまた「私がみた最も幸福な共働き結婚は、かつての主婦=母親の役割を女性に押しつけることなく、またそうした役割を過ぎ去った

農民の生活様式だと見下すこともない男女の間の結婚であった。彼らは役割を分かち合っていた (p. 394)」と述べているように、男女の家庭と職業役割における均衡は、男を家庭へ、女を職場へ戻し、共に2つの役割を共有する方向に着実に進んでいくと考えられている。父親を家庭に取り戻して家庭人・地域人として、また親としてしっかりと存在すること、そしてそのために、共働きの父親に妻や社会による育児サポートを保障していくことこそが、家族というシステムが効果的に機能する上で、とりわけ重要なことだといえよう。

VII おわりに

父親の家事・育児参加は、とくに乳幼児をもつ働く母親の増加を背景に、世界的にますます注目を集めてきている。そして父親の育児への積極的関与は、乳幼児の発達諸側面で著しい成果を示していると評価されている。共働き家庭では、父親の家事・育児参加は高くなり、親(父)子関係としては肯定的な影響が多いにも拘らず、夫婦関係では、より平等な労働分担の調整の過程で否定的な影響つまり夫婦間の不和や葛藤が多いことをさまざまな調査研究に基づいて考察してきた。今回は親役割研究における、共働き家庭の家事・育児にかかわる問題に焦点を当てて検討したが、親になる過程すなわち親業移行の問題、親子対夫婦関係などについて、さらに検討を加えていきたい。

引用文献

- Baruch, G.K. & Barnett, R.C., Fathers' participation in family work and children's sex-role attitudes. *Child Development*, 57, 1986, 1210-1223.
- Barnett, R.C. & Baruch, G.K., Determinants of father's participation in family work. *J. of Marriage and the Family*, 49, Feb, 1987, 29-40.
- Bates, J.E., C.A. Freeland & M.L.L. Lounsbury., Measurement of infant difficulties. *Child Development* 50, 1979, 794-803.
- Bernard, J., *The future of marriage*. N.Y.; World, 1972.
- Belsky, J., Early human experience: A Family perspective. *Developmental Psychology*, 1981, 17, no. 1 3-23.
- Belsky, J., The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, 55, 1984, 83-96.
- Bem, S.L., The Measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 1974, 42, 155-162.
- Benin, M.H. & Agostionelli, J., Husbands' and wives' satisfaction with the division of labor. *J. of Marriage and the Family* 50, 1988, 349-361.
- Darling-Fisher, C.S. & Tiedje, L.,B., The impact of maternal employment characteristic on fathers' participation in child care. *Family Relations*. 39, 1988, 20-26.
- Dickie, J, R., Interrelationships within the mother-father-infant triad. In P.W. Berman & F.A. Pedersen (eds), *Men's Transitions to Parenthood*. L.E.A. 1987. 112-143.
- Feldman, S.S., S.C. Nash & B.G. Aschenbrenner, Antecedents of fathering. *Child Development*, 54, 1983. 1628-1636.
- Harris, K.M. & Morgan, S.P., Fathers, Sons, and Daughters: Differential paternal involvement in parenting. *Journal of Marriage and the family*, 53, 1991, 531-544.
- Heath, D.H., Competent fathers: their personalities and marriages. *Human Development*, 19, 26-39. 1976.
- Hochschild, A., *The second shift: working parents and the revolution at home*. N.Y.; Viking Penguin, 1989.
- 邦訳『セカンド・シフト アメリカ共働き革命のいま』田中和子訳 朝日新聞社 1990.
- Crouter, Ann C., Perry-Jenkins, M.T. Huston & S.M. McHale, Processes underlying father in dual-earner and single-earner families. *Developmental Psychology*, 1987, 23, no. 3. 431-440.
- Kessler, R.C. & J.A.McRae, The effect of wives' employment on the mental health of married men and women. *American Sociological Review*, 47, 1982, 216-227.
- McHale, S.M. & T.L. Huston, Men and women as parents: Sex role orientations, employment, and parental roles with infants. *Child Development*, 55, 1984. 1349-1361.
- Mondell, S. & F. Tyler, Parental competence and styles of problem solving/play behavior with children. *Developmental Psychology*, 17, 1981. 73-78.
- Palkovitz, R., Parental attitudes and fathers'

- interactions with their 5-month old infants. *Developmental Psychology*, 1984. 20. no. 6. 1054-1060.
- Parke, R.D., Perspectives on father-infant interaction. In J.D. Osofsky(ed.), *Handbook of infant development*. N.Y.; Wiley, 1979.
- Pleck, J.H., *Working wives / working husbands*. Newbury Park, CA; Sage, 1985.
- Radin, N., Primary caregiving and role-sharing fathers. In M.E. Lamb(ed.), *Nontraditional families: Parenting and child development*. Hillsdale, N.J.; Erlbaum, 1982.
- Rapoport, R & Rapoport, R.N., *Dual-career families re-examined*. N.Y.; Harper, 1976.
- Ross, C.E. J. Mirowsky & J. Huber, Deviding work, sharing work, and inbetween: Marriage patterns and depressoin. *American Sociological Review*, 48. 1983, 809-823.
- Rossi, A., Gender and parenthood. *American Sociological Review*, 49, 1984. 1-10.
- Russell, G., Highly participant Australian fathers: some preliminary findings. *Merrill-palmer Quarterly*, 1982, 28, no 1, pp 137-156.
- Russell, G., *The Changing Role of Fathers?* University of Qweensland Press, 1983.
- Russell, G., Grandfathers: Making up for lost opportunities? In R.A. Lewis & R.E. Salt (eds.), *Men in families*. Beverly Hills; Sage. 1985.
- Russell, G., Shared parenting: A new child-rearing trend? *Early Child Development and Care*, 24. 1986. 139-153.
- Sagi, A., Antecedents and consequences of various degrees of paternal involvement in child rearing: The Israel project. In M.E. Lamb (ed.), *Nontraditional families: Parenting and child development*. 205-232. Hillsdale, NJ; Erlbaum, 1982.
- Sirignano, S.W. & M.F. Lachman, Personality change during the transition to parenthood: The role of perceived infant temperament. *Developmental Psychology*, 21, 1985, 558-567.
- Spitze. G., Women's employment and family relations: A review. *Journal of Marriage and the Family*, 50, 1988, 595-618.
- Stains, G.L, Pleck, J.H., Shepard. L.J. & O'Connor, P., Wiyes' employment status and marital adjustment: yet another look. *Psychology of Women Quarterly*, 3. 90-120.
- Stanley, S.C., J.G. Hunt & L.L. Hunt, The relative deprivation of husbands in dual-earner households. *Journal of Family Issues*, 7. 1986. 3-20.
- Volling, L. & Belsky, J., Multiple determinants of father involvemens during infancy in dual-earner and single-earner families. *Journal of Marriage and the Family*, 53, 1991. 461-474.
- Yogev, S. & Brett, J., Perceptions of the division of housework and child care and marital satisfaction. *Jourral of Marriage and the Family*, Aug. 1985. 609-618.

(受理 平成 4 年10月26日)

Abstract**Comparative Analysis of the Paternal Family Work Involvement
in Dual-Earner Families with Single-Earner Families**

Ritsuko KOHNO

(Department of Child Education)

Over the past two decades, empirical studies of the father-child relationship have increased dramatically. They concluded that fathers play an important and distinctive role in social and cognitive development of their children.

This study examines the distinctions of the determinants of paternal involvement in family work (household chores and childcare) in dual-earner and single-earner families by doing some review of the dominant empirical data.

In dual-earner families, fathers may be pressured to be involve in their children's care, which may have a negative effect on their marital relationship, while father's of single-earner families may not feel that pressure.

Working mothers also experience pressures and/or conflicts of their dual-role overload. Subsequently, it is found that it must be essential for working fathers and mothers to share their responsibilities of parental roles and household chores for their greater marital accord and better children's development in dual-earner families. While a lot of mothers in single-earner families are experiencing great difficulty with the sole responsibility of child rearing with little help from their fathers in the "breadwinner-role", fathers in dual-earner families would need more help in the area of spousal and social support for the transition period from traditional to a more egalitarian sex-role ideology.

(Received October 26, 1992)